

命の大切さ

八街市立八街北中学校 三年 立田 聖真

命とは私たちにとって、なくてはならないものです。なぜなら命があるからこそ、私たちは喜び、悲しみ、楽しんだり、家族や仲間と笑いあえることができるからです。

私は、命があり今日も生きています。しかし、明日が必ずやってくる…それは決して当たり前のことではないのです。

私には、祖父母が四人、曾祖父が一人、曾祖母が三人おりました。今現在は、祖父母が二人しか生きていません。みんな、病気で亡くなりました。まだ小さかった私ですが、とても優しく接してくれた事や、一緒に遊んでくれた事、とてもかわいがってくれた事、それぞれの祖父母達とのあたたかい思い出がたくさんあります。しかし、それと同時に、祖父母達の「命の終わり」も鮮明に記憶に残っております。当たり前のようにいつもそばにいてくれて、一緒に笑い合っていた祖父母達がもういない…会えない…私は小さいながらも、大きな喪失感を抱いたことを今でも覚えています。私が「命」について初めて考えたのもその頃だったと思います。

友人や家族の何気ない言葉がその人から聞いた最後の言葉となってしまうかもしれない。そう考えると学校に行くのも、家に帰るのも、外に出かけるのも、何もかもが怖くなってしまいます。それは、病気で別れに限らず、一瞬のうちに奪われてしまう命もあります。事件や事故は、いつでも誰にでも、たとえどれだけ注意して生活しようと、起こりうる事です。私は、ニュースや新聞で殺人事件や死亡事故の記事を見ても、「犯人ひどいな〜。」「亡くなった人はかわいそうだな。」「物騒な世の中だな〜。」程度にしか考えず、被害がどこまで影響しているかなど、深く考えたことがありませんでした。しかし、あの事故から私の考えはガラリと変わりました。とても身近なところで起きてしまったあつてはならない出来事でした。私が住んでいる八街市で、昨年起きてしまった、あまりにも悲惨な事故でした。あの事故は、子ども達がきちんとルールを守っていたのに、たった一人の大人がルールを破ったことにより、何の罪もない子ども達の尊い命が奪われてしまった、あまりにも悲しい、やるせない出来事でした。

突然、大切な人の命を失う悲しみ、当たり前のようにやってきていた明日が来ない恐ろしさ、ご家族の気持ちを考えると胸がしめつけられる思いです。私には計り知れない

悲しみと、恐ろしいほどの精神的苦痛に追い込まれたことだろうと思います。そしてその心の傷は一生癒えることはないでしょう。私自身も、あの可愛い笑顔と大切な「命」を奪われたことに、やるせない気持ちと、強い憤りを今でも強く感じています。

「命」とは、自分だけのものではありません。家族、仲間、周りの人々、色々な人達から支えられているものなのです。この世界の全ての人々の「命」が一つ一つかけがえのない、尊い両親から贈られた大切な宝物なのです。

当たり前が明日がやってくるのがどんなに幸せなことか。今、一緒に喜び、悲しみ、楽しみ、笑い合える家族や仲間がいることがどれだけ素晴らしいことか。一人一人が今を生きられていることに感謝し、周りの人々を思いやる気持ちを忘れずに、自分のことも、相手のことも大切に愛おしく思い合う…そんな想いが少しずつでも広がっていくような世界を私は作りたい。